古代山城の門　－九州を中心に－

九州歴史資料館　吉田東明

１．九州の古代山城

7 世紀の東アジア情勢

古代山城とは、我が国の飛鳥時代から奈良時代頃にかけて、西日本各地の山に築かれた城郭施設の総称である。

7 世紀前半、朝鮮半島は高句麗・百済・新羅の三国鼎立状態にあった。618 年に統一帝国を形成した唐は 640～650 年頃に全盛を迎え、各方面への侵略を企てるようになる。645 年に新羅の救援要請を受けた唐は朝鮮半島に直接介入し、唐・新羅連合軍は 660 年に百済の都、泗沘（しひ・サビ）城を襲い百済を滅亡させた。

百済の遺臣たちは復興のための援軍を倭国に要請した。斉明天皇は救援のための援軍派遣を決定し、661（斉明七）年に筑紫に遷居するが（朝倉橘広庭宮）、当地にて死去する。中大兄皇子は称制という形で大王位を代行して派遣軍を渡海させ、663（天智二）年に白村江にて唐・新羅連合軍と会戦したが、大敗を喫する結果となった。

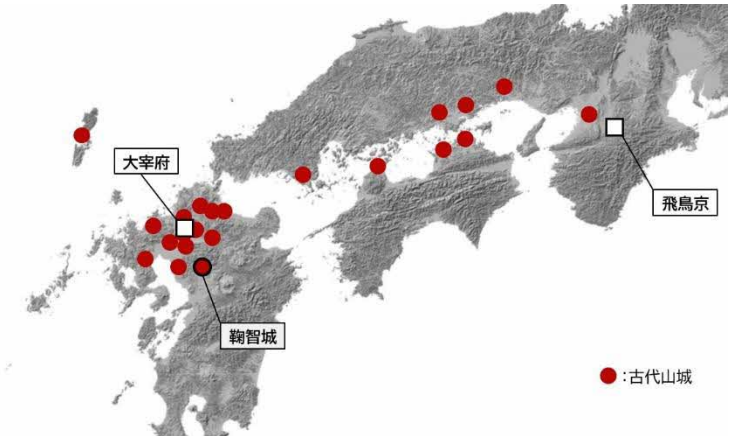
7 世紀前半頃の東アジア状勢

白村江の戦い後、倭国に対して唐が新羅と連合することはなく、やがて唐・新羅両国は対立関係に陥る。668（天智七）に唐は高句麗の内紛に乗じて高句麗を滅ぼしたが、同年、新羅と倭国の復交がかない、両国の緊密な交流が行われることとなった。676（天武五）年には唐が遼東へと退却し、新羅は朝鮮半島統一を果たしたのである。

日本の古代山城

663（天智二）年の白村江での敗戦後、倭国は唐・新羅の侵攻に対する防衛体制の緊急整備が国家的急務となり、このことが山城築造の直接的な契機になったとみられる。『日本書紀』によれば、白村江敗戦翌年の 664（天智三）年に対馬・壱岐・筑紫国等に防（さきもり）と烽（とぶひ）を置いて筑紫に水城を築き、さらに翌 665（天智四）年には長門国に城を築き、また、百済亡命高官の達率憶禮福留（おくらいふくる）・四比福夫（しひふくぶ）を筑紫国に遣わして大野・椽（き）（基肄）の二城を築かせている。さらに、667（天智六）年には倭の高安城・讃岐屋嶋城・対馬金田城を築く。664 年以降、矢継ぎ早に行われた防衛体制の構築過程をみると、まずは筑紫国までの情報伝達手段を整備し、次に大宰府を中心とした

防衛網を整え、さらに都に至るまでの海路沿いの要衝に拠点となる山城を築き、防衛体制を構築していった様子がうかがわれる。



古代山城の分布

現在までに西日本の各地で見つかっている古代山城は、22ヶ所を数える（怡土城を除く）。これらのうち、『日本書紀』や『続日本紀』に登場する古代山城は 6 ヶ所あり、これらは「朝鮮式山城」と呼ばれている。また、記録には登場しないが遺跡として確認されている古代山城も 16 ヶ所あり、これらは「神籠石（こうごいし）系山城」と呼ばれてきた。「朝鮮式山城」と「神籠石系山城」には構造上の共通点も多く、築造時期も近接すると思われることから「古代山城」と総称されている。なお、文献史料に登場するが所在が分からない山城も 5 ヶ所ある。

九州の古代山城

古代山城は、九州北部から瀬戸内海沿岸を経て畿内に至るまでの間の、陸上・海上交通の要衝に置かれており、特に九州の北・中部には古代山城が集中して分布する。その数は 14 ヶ所を数え、我が国の古代において、内政・外交・軍事の面で重要な役割を果たした「大宰府」の擁護が、国防上の最優先事項だったことがわかる。

大宰府は周囲を山々に囲まれた天然の要害の地にあり、北に位置する四王寺山には大野城、南の基山には基肄城、北西の福岡平野へと続く狭い平地部には、そこを塞ぐように水城が築造された。筑後平野に面した東側には阿志岐（あしき）山城が築かれた。さらに、水城の北西には小水城と呼ばれる小型の土塁が 3 ヶ所で見つかっており、また、基肄城の東側でも小水城に類似する土塁が 2 ヶ所確認されている。このように、大宰府の周囲には、一連の大宰府防衛構想に基づいて要衝に山城や土塁を築造し、自然地形と一体となって「大宰府外郭線」の形成が行われた。また、大宰府外郭線のさらに外側、各地域で交通の要衝となるような場所にも古代山城が築造された。

九州の古代山城の分布

２．古代山城の構造

土塁・列石・版築

わが国の古代山城の多くは土塁によって城壁が形成される。城壁を石塁で構築する金田城は、我が国では特異な存在である。

土塁は、土を帯状に長く積み上げて構築される。土塁構築の際には、まず基底部を念入りに整形して平坦面を造成し、土塁の外端となる位置に石を並べて列石とする。大野城では不整形の割石を並べるが、九州北部の他の古代山城では、ていねいに長方形に加工した切石を隙間なく一列に並べる点に大きな特徴がある。土塁はこの列石の上に積み上げられる。

尾花地区土塁／大野城

土塁には一般的に「版築」と呼ばれる積土技法が用いられる。版築はもともと中国の黄河流域で発達した黄土を叩き締めて硬化させる積土構築技法で、朝鮮半島を経由して日本列島へと伝えられた。古代山城の発掘調査を行うと、土砂を堅固に搗き固めながら高く積み重ねた版築の状況を見ることができる。

版築工法模型／水城（九州国立博物館）

石塁・水門

古代山城は土塁のみで構築されるのではなく、多くの場合、石塁が併用される。石塁は城壁が谷部を横断する際に構築される傾向にある。大野城の場合、城壁北側に築かれた全長 150m、高さ 5m の石塁「百間石垣」が有名である。谷部にあるため流水処理を工夫する必要があり、通水溝や水口を伴う「水門」を付設する石塁も少なくない。

百間石垣／大野城

城門

城門は、城壁の内外を往来するために必要な施設である。通路は谷沿いを通っている場合が多く、そのため、谷部に構築された石塁に付随して門が設置される場合が多い。

大野城ではこれまでに 9 ヶ所の城門が確認されている。規模が最も大きな太宰府口城門は高低差のない平門（ひらもん）構造、近年新しく見つかった北石垣城門やクロガネ岩城門は通路と門道の間に高低差がある懸門（けんもん）構造である。門礎石も 7 ヶ所で確認されている。

内部施設

内部施設については、大野城・基肄城・鞠智城では複数棟の建物跡が確認されているが、九州北部の他の古代山城で建物跡が確認されている事例は非常に少ない。その他の内部施設では、例えば御所ヶ谷の城壁内部にある馬立場と呼ばれる石垣は、貯水池の可能性があるとされる。大野城でも城壁の内側で井戸状の窪地が複数確認されているが、古代山城に帰属するかどうか疑問視する意見もある。

尾花地区礎石群／大野城

3．古代山城の門

官衙の門・山城の門

8 世紀前半頃に造営された大宰府政庁（第Ⅱ期）では、南門が桁行五間の柱間をもち中央の三間を扉口とする五間三戸門、中門が桁行三間で中央一間を扉口とする八脚門である。大宰府に限らず古代官衙の門、とりわけ正門は、官衙を象徴する構築物として荘厳さが重視される。

政庁南門復元模型／大宰府跡

他方、古代山城の門は防御的側面を重視して構築する必要がある。そのため官衙の門と違って間口が狭く、堅牢に構築される傾向にある。

古代山城の門には、段差がなく水平または傾斜した坂道に造られる平門と、大きな段差があり梯子等を使用して出入りする構造の懸門がある。大野城の場合、太宰府口城門は平門だが、クロガネ岩城門や北石垣城門は懸門となることが発掘調査によって明らかになった。クロガネ岩城門や北石垣城門は、門から城内に入るとすぐ山の斜面に直面するため、必然的に曲がって進入せざるを得ない。平門構造の太宰府口城門でも、門の内側に板塀のような遮蔽物を設置しており、直進できない構造を採っている点では同様である。

古代山城では門の下部に石製の門礎石（門礎・唐居敷（からいじき））を設置することが

多い。官衙では石製の門礎石を使用せず、木製が一般的だったようである。

古代山城の門礎石にはさまざまな形状がある。形状の差異については、これが時期的な変遷を示すと解釈する見方と、故地である朝鮮半島の系統差に基づくと解釈する見方がある。

大野城 太宰府口城門

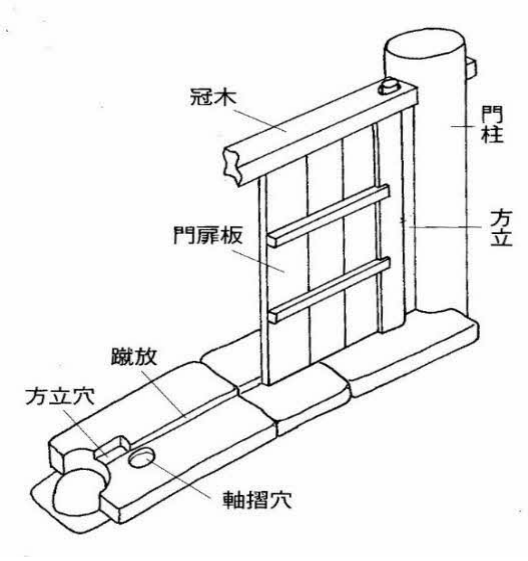
大野城の大宰府口城門では、7 世紀後半から 8 世紀にかけて三期にわたる変遷が知られている。

第Ⅰ期（7 世紀後半）：掘立柱建物で八脚門に近い構造となる。門幅 9.3m。

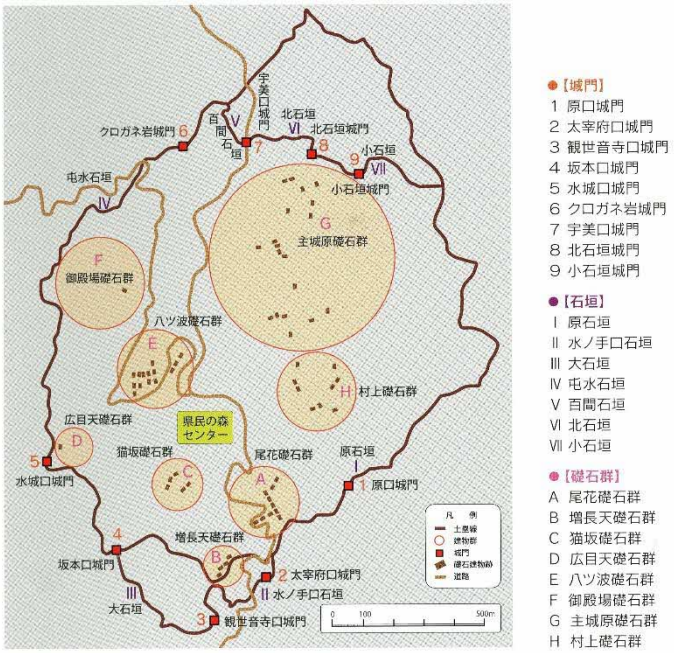
第Ⅱ期（8 世紀前半）：瓦葺き礎石建物。地覆石にⅠ期門礎石を転用。門幅 5.2m。

第Ⅲ期（8 世紀後半以降）：瓦葺き礎石建物。門道側壁の石垣を修復。

Ⅰ期の門礎石は掘立柱に添えるための円弧状の刳り方を設け、方立穴（ほうだてあな）と円形の軸摺穴（じくずりあな）を備えている。両側にあるⅡ期の門礎石には柱を据えるための円形の柱座（はしらざ）があり、方立穴と小型方形の軸摺穴を有している。大野城ではこれら以外にも形状の異なる門礎石が確認されているため、それらの差異を時期的変遷とみるのか、それとも技術集団の系譜差に基づくとみるのか、意見が分かれている。



門の構造（山田隆文 2011）

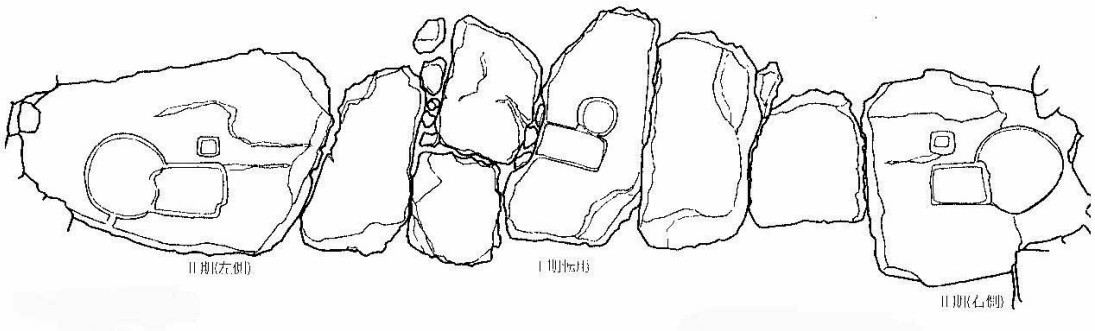


大野城跡

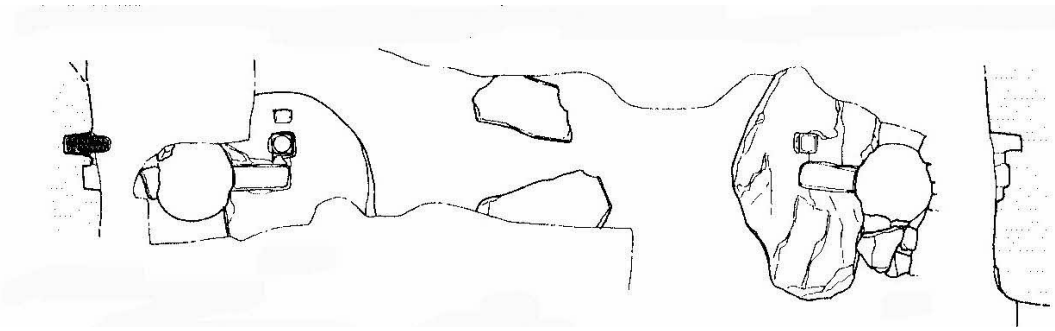
大野城 北石垣城門

北石垣城門の門道は、城外側で幅 4.7m、城内側で幅 4.1m を測り、外側へと少し開いた形状となる。門道の両脇に立てられた柱に接する位置で、それぞれ門礎石が据え置かれた状態で見つかった。門礎石は柱に沿って円弧状の刳り方があり、方立穴と方形の軸摺穴が刳り込まれていた。これら二つの門礎石のうち、東側の軸摺穴には鉄製の軸摺金具（じくずりかなぐ）が嵌め込まれた状態で見つかった。

城門のすぐ外側には石垣が築かれ、さらにその外側には平坦面がある。平坦面と城門床面とは 1.5m ほどの比高差があることから、この北石垣城門は懸門構造であることが分かった。



太宰府口城門の門礎石／大野城



北石垣城門の門礎石／大野城

水城 西門

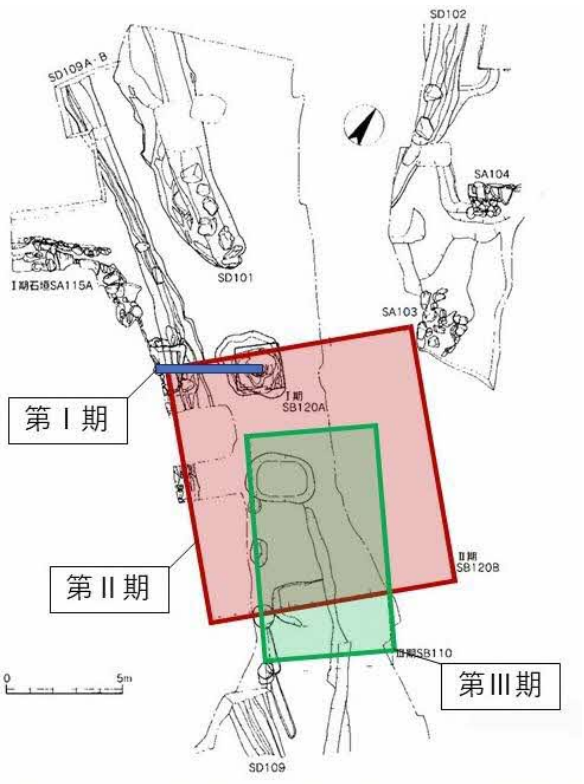
水城は東西に門が設けられ、福岡平野と大宰府とをつなぐ直線的な道路（官道）がそれぞれ通過していた。西門は発掘調査の結果、7 世紀後半から 8 世紀にかけて三期にわたる変遷が確認された。

第Ⅰ期（7 世紀後半）：掘立柱建物で 2 本柱。門幅 4.2m。通路壁面は石垣積み。

第Ⅱ期（8 世紀前半）：瓦葺き礎石建ちの八脚門。門幅 11.5m（中央幅 4.5m）。

第Ⅲ期（9 世紀）：瓦葺き礎石建ちの四脚門。重層門で門幅 5.4m と推定。

変遷の過程をみると、第Ⅰ期は 2 本柱の簡素な造りで門幅も狭く、側面に石垣を築いた堅牢な城門だったものが、第Ⅱ期には屋根に瓦を葺いた壮麗な造りで門幅も 11.5m に広がり、防御よりも外見を意識した構築物に変化したようである。



水城西門

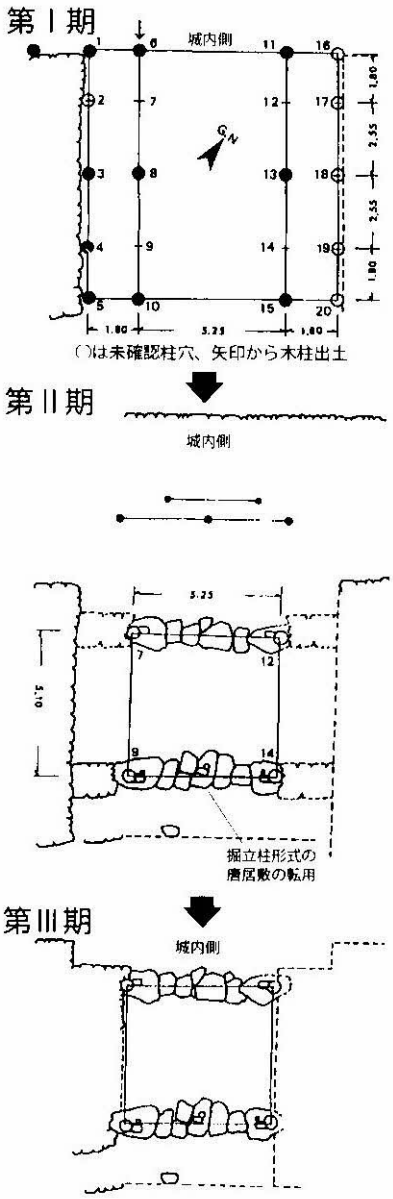
金田城 南門

石塁による城壁が周囲を囲繞する金田城には「城戸」と呼ばれる三つの城門の他、新たに確認された「南門」や、内部の土塁に付随する「ビングシ門」がある。

南門の発掘調査では、間口 1 間、奥行 3 間の礎石建物跡が見つかった。城外側から 2 つ目の柱列に扉の軸摺穴がある。側壁には石積みが行われ、床面はすべて石敷である。門の外側から門道部分にかけて階段が構築される点が大きな特徴である。二ノ城戸門では間口 1 間、奥行 2 間の礎石建物跡である。城外側の柱列に軸摺穴があり、床面は石敷を行う。

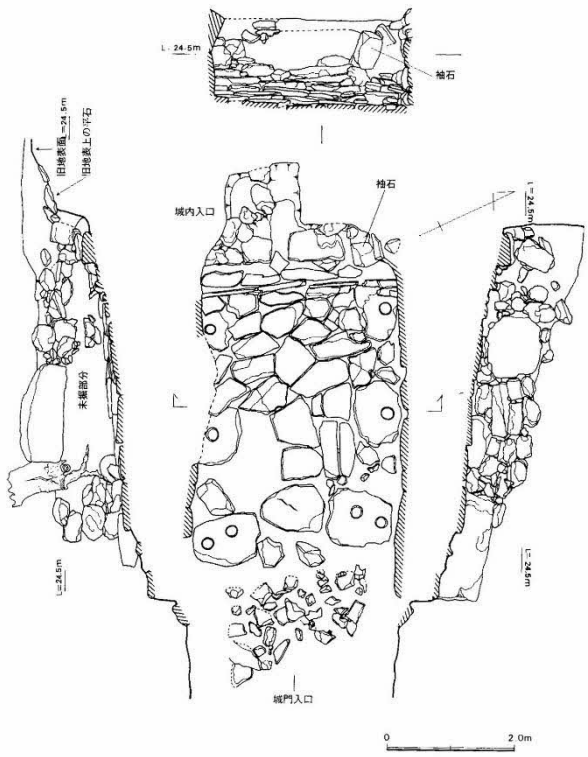
門の種類・構造・幅の事例　※内容は各報告書・論文に基づく

大野城太宰府口城門 第Ⅰ期・平門	掘立柱（3 間×4 間）	円弧状刳り方 方立穴・円形軸摺穴	5.25m（柱間）
大野城太宰府口城門 第Ⅱ期・平門	礎石（1 間×1 間） 瓦葺き	円形柱座 方立穴・方形軸摺穴 蹴放石列	5.25m（柱間）
大野城太宰府口城門 第Ⅲ期・平門	礎石（1 間×1 間） 瓦葺き	円形柱座 方立穴・方形軸摺穴 蹴放石列	5.25m（柱間）
大野城水城口城門 懸門	掘立柱（1 間）	円弧状刳り方 方立穴・円形軸摺穴 蹴放材嵌め込み溝	3.8m（軸摺穴間）
大野城北石垣城門 懸門	掘立柱（1 間）	円弧状刳り方 方立穴・方形軸摺穴	4.1m（柱間）
基肄城東北門	掘立柱（1 間）	円弧状刳り方 隅丸方形軸摺穴	約 1.9m
大野城原口城門Ⅰ期	掘立柱（1 間） 門外に石敷・石垣	円弧状刳り方 円形軸摺穴	約 3.6m（柱間） 門礎石Ⅱ期に転用
金田城南門 懸門	礎石（1 間×3 間）	円形軸摺穴（排水溝）	2.38m（軸摺穴間）
金田城二ノ城戸門 懸門	礎石（1 間×2 間）	円形軸摺穴	2.8m
水城西門第Ⅰ期 平門	掘立柱（1 間） 推定冠木門	円弧状刳り方 方立穴・円形軸摺穴	4.2m（柱間）
水城西門第Ⅱ期 平門	礎石（3 間×2 間） 推定瓦葺き八脚門	方立穴・円形軸摺穴 （元位置から移動）	推定 4.5m
水城西門第Ⅲ期 平門	礎石（3 間×1 間？） 推定瓦葺き楼門	方立穴・円形軸摺穴 （元位置から移動）	5.4m



太宰府口城門の変遷

金田城南門



金田城二ノ城戸門